

—— 東京海潮の巻々 巻二 千々百 ——

ふつふつ

巻二

山神英民識

照井人編

まえがき

昭和二十二年三月八日、福生そろばん会が発足した。会員は役場の勤人など、いまでいう勤労青年男女の十数人だった。

そろばん会のはじめから、なんとなしに皆でものを書きあった。最初は各自の作文をとじて回覧にした。

しかし次からは、ガリ刷りにして出した。それが、珠算月報第一号である。月報の四号目か五号目のころ、

「皆さん、月報に意見を寄せてください」と書いておいたら、熱心な父母から一通だけ便りを受けた。

「何も注文はないが、字を読めるようにしてもらいたい。——長沢・清水正守」とあった。ああそうですか、と読みかえしたら、自分でも読むのに骨の折れた月報だった。

月報は第二十号から、毎月一日発行とした。中味うんぬんをいっていたら、とてもこの私に出せるわけがないと諦観し、その代わりに毎月一日発行の熱意をくみとってもらえれば、という主義で通してきた月報である。

これが、この七月で二百四十号になる。二十周年というわけだ。

ここで、この月報の特集号のような形で、一冊の本にまとめてみることにした。

本の名前を『ふっさっ子』とした。

町の人だれもが、この一冊を手にして楽しんでいただけるものになりたいと、願いをこめたつもりである。

この一集には、『子どもの意見』と、『わんぱく時代』を中心にしたが、「ふっさ」に関する話題をつぎつぎとこの『ふっさっ子』でまとめておきたい希望で、第二集以下も続く限り、と欲張っている。

うしろへ、「福生珠算学校のあゆみ」を加えた。

まだ、業績もない珠算学校なのにせんえつですが、珠算月報のもとにあるものとしての、歩

みをお知らせしたものととしてお許しを願います。

昭和四十四年三月

山崎茂男